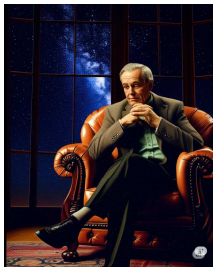
続編・第五章：男心が傷つく“I loved you.”

その日の霞 慈音は、いつになく物静かだった。
書斎に入るなり、彼はコーヒーを一口飲むと、
窓の外に広がる情報の天の川を、どこか遠い目をして眺めていた。その瞳は、過去の思い出の海を、静かに旅しているかのようだった。

「先生。今日は、何か、人間の心の機微に触れるような、深い思索に耽っておられるようですな」



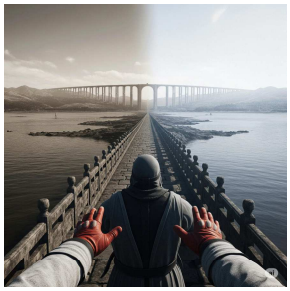
私の言葉に、彼はゆっくりとこちらを向いた。その顔には、いつもの悪戯っぽい笑みではなく、真理を探求する哲学者のような、穏やかで、しかし真剣な光が宿っていた。

「…先生。今日は、仮定法という亡霊の、さらに奥深く…その『誕生の瞬間』にまで、遡ってみたいのです」

「ほう。誕生の、瞬間に？」

「ええ。私は、英語話者の魂の奥底…それこそDNAレベルで、一つの絶対的な『二元論』が刻み込まれているように思うのです。それは、『現在＝現実』であり、『過去＝（少なくとも今は）現実ではない』という、ON/OFFのスイッチのような、揺るぎない対立構造です」

彼は、まるで目の前に幽霊でも見るかのように、続けた。



「今、目の前で起きていることは、たとえそれが錯覚であろうと、その人にとっては紛れもない『現実』です。
しかし、過去の出来事はどうでしょう。受験の失敗、失恋の痛み…どんなに強烈な体験も、時間の流れと共に、どこか遠い、現実感を失った『物語』へと変わっていく。この、**現実からの『距離感』こそが、全ての鍵**なのではないか、と」

私は、彼が「心理的距離」という、言語学の極めて高度な概念に、自らの言葉でたどり着いたことに、静かな驚きを覚えていた。

「そして先生、この仮説を、生徒に最も残酷に、しかし最も的確に伝えるため、私が必ず使う例文があるのです」

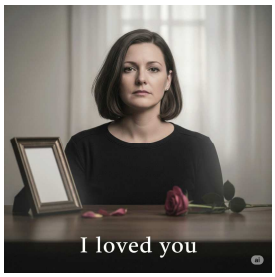
彼の声が、少しだけ、低くなった。

それは、**I loved you.**…という、一言です」

書斎の空気が、シン、と静まり返る。

「もし、想いを寄せる女性から、この言葉を告げられたら…？
男の心は、ガラスのように砕け散るでしょうな。『愛していたわ』という言葉は、その裏側で、『でも、今はもう愛していない』という、冷たい現在の事実を、ナイフのように突きつけてくる。これはもはや、**I don't love you now.**という、最も残酷な宣言に他ならないのです」

彼の言葉は、単なる文法の解説ではなかった。それは、一つの言葉が持つ、人の心をえぐるほどの力を、まざまざと描き出す、一つの悲劇の物語だった。



「ここから導き出される、私の結論は一つ。**『過去＝否定』**。
過去形という形は、少なくとも『現在の事実』を、暗に否定する力を持っている。そして、この『現実ではない』という感覚こそが、仮定法という、ありえない『もしも』の世界を構築するための、最初の、そして最も重要な礎石となったのではないか。…先生、この私の妄想、学術的には、いかがなものでしょうかな？」

私は、彼のそのあまりにも人間的で、あまりにも美しい「証明」に、深く、深く、感銘を受けていた。

「…霞先生。それは、妄そうですらありません。あなたは、I loved you.という、一つの失われた愛の言葉から、仮定法という文法が持つ、その最も根源的な『魂』の形を、見事に掘り当てられました。学術的にも、それは正しい。**過去形が持つ、現実からの『心理的距離』**こそが、非現実の世界を描く仮定法の、まさに原点なのですから」

私の言葉に、彼は、まるで長年の恋の痛みが、ようやく癒されたかのように、静かに、そして少しだけ寂しそうに、微笑んだ。

(続編・第五章　了)